第二六章　魔軍の敗戦（二六）

竹熊はなお懲りずまに、執念深くも最初の目的を貫徹せむとし、魔子彦、足長彦、牛人、寅熊と相語らい、こんどは金勝要神を手に入ることを断念し、大八洲彦命を高天原より排除せむとした。然るに、足長彦はなお依然として金勝要神をねらい、寅熊も亦同じく之を内心ひそかにねらっていた。そうして魔子彦は甘言をもって大八洲彦命の身辺に近づき、隙あらばこれを刺殺さむとする計画であった。

しかし、もとの謀主は竹熊であるから、各自の野望を心中深く秘めながら、互いに自己本位の計画をたてていた。竹熊は、大神に信任厚き熊足彦を味方につけ、牛人、※与彦、黒姫、菊姫を部将と定めて暗々裡に活動をはじめた。また熊彦は杉山彦、中裂彦、照姫、藤姫、花立姫、土彦、※谷熊、蟹熊の邪神を部将として、暗々裡に活動していた。そうして熊彦は足長彦を参謀につかって、盛に大八洲彦命を討取る計画をすすめていた。一方また魔子彦は田依彦、豆寅、胸長彦、草香姫、時津彦、梅若彦、八島姫、高山彦の神々を部将と定め、大八洲彦命の歓心を買い、搦手より竜宮の実権を握り、その上、事をなさむとの下心であった。しかしこれらの三巨頭は、表面一致の行動をとって竜宮占領の計画をすすめ、あまたの魔軍をかり集めてまっしぐらに黄金橋に攻めかけた。しかしいずれも自己を本位とする

※与彦……四方与平氏のこと。

※谷熊……地獄谷（上谷）で聖師さまを待ち伏せしていた暗殺隊の一人で谷口熊吉氏のこと。

魔軍の団結であるから、今一息というところで、四分五裂のやむなきに立ちいたった。

さる程に、竹熊は猿飛彦、木常姫を背後の参謀として、熊彦、魔子彦を両翼とし、綿密なる作戦計画に着手した。第一に、自分の地位を保護する必要ありとし、牛人および魔子彦を使い、足長彦を偽って遠き土地に去らしめ、与彦、黒姫、菊姫をして数多の魔軍を引率せしめ、※橄欖山のうしろに忍ばしめて時の来るを待たしめた。また一方魔子彦に命じて、足長彦の行動を監視せしめた。ここに熊彦の部下なる土彦は魔子彦の計略を悟り、密使をもって足長彦に一伍一什を報告した。そうしてまた魔子彦は胸長彦を参謀とし、豆寅の妻なる草香姫をついに奪いとった。魔子彦には、田依彦という邪神が影のごとくに附随して、種々の企策を援けておった。田依彦は草香姫の弟である。そこで魔子彦の行状をうかがい知ったる、熊彦の部下なる杉山彦、中裂彦、花立姫、土彦、谷熊、時彦などが憤慨して、魔子彦をヨルダン川に沈め殺さむとした。しかるに、梅若彦、八島姫、高山彦は魔子彦のきたなき行動に愛想をつかして、その実況を大八洲彦命に報告するとともに善心に立復り、大八洲彦命に心の底から帰順した。

このとき大八洲彦命はヨルダン川を渡り、はるかの東方に出陣していたのである。一方熊彦は、また竹熊の部下なる牛人、与彦、黒姫、菊姫、谷熊、寅熊とともに、橄欖山の後に陣をかまえて待伏せた。これは大八洲彦命を第一着に亡ぼして目的を達せむためであった。

※橄欖山……ここでは綾部の中心に聳える世継王山（四尾山）のこと。

大八洲彦命は魔子彦を帰順せしめ、武勇絶倫なる高山彦の軍勢を引率して、竜宮城に帰還し、杉山彦の返り忠なる報告によって、竹熊の謀計をさとり、遠巻に橄欖山をとり囲み、一挙にこれを殲滅せむと天の磐船をもって火弾を投げつけた。たちまち竹熊の軍勢は蜘蛛の子を散らすごとく、四方八方に散乱してしまった。

（大正一〇・一〇・二一　旧九・二一　谷口正治録）

瑞　月

魔子彦が殺されんとする源は
　犯せしつみにヨルダンの川
竹熊が神をあつめてかきまはす
　さるとび彦の歯がゆき参謀